※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況などと共にご紹介していきます。

Activity report

活動報告

愛媛県新居浜市 在宅医療・介護に関する訪問調査を通じて

当センターでは、超高齢化社会の中で、高齢者が安心して生活できる環境・制度を構築するための研究に取り組んでいます。今回、高齢者への医療・福祉領域、特に在宅での高齢者への医療・介護について考えるために、愛媛県新居浜市の新居浜医療生活協同組合（以下、新居浜医療生協）を訪問しました。

新居浜医療生協の特徴

新居浜医療生協は、地域に根付いた住民参加型の医療・福祉体制を目指して、診療所を中核に、在宅での医療・介護の提供や高齢者向けのシェアハウスの提供を行い、医療と介護を横断したサービスを行っています。現在、保険制度上では、医療と介護は分離しており、通常は別の機関がそれぞれ医療と介護を担当しています。新居浜では、医療生協が両方の施設を保持することで、医療と介護のサービスをつなげ、一体化させています。このことによって、医療側の情報はスムースに介護側に伝わり、患者の健康状態にふさわしい介護を行うことが出来、また、逆に介護側から情報が伝わることで、自宅にいても医療側は患者の健康状態を把握したり、予防的処置を試みたりすることが可能となっています。医療・介護間、そして医療生協と地域との間に、緊密な連携を築くことで、高齢者の方が求めている医療・介護を、必要なタイミングで提供することを目指しています。住み慣れた自宅での終末期医療を希望する方には、在宅での看取りを行い、高齢者の生活の質の向上に取り組んでいます。

高齢社会におけるまちづくり・働き方

新居浜医療生協は、これらの医療・介護分野での特徴に加えて、高齢社会におけるまちづくりや働き方に関しても、独自の考え方を持っています。高齢者向け・認知症患者対応型のシェアハウスを設置し、高齢者が共同生活を行う環境を作り出す、あるいは定年制度を廃止し、柔軟性の高い労働環境を作ることで、70 代であっても現役で仕事が出来る環境を整備するなど、これまでとは異なるまちづくり、働き方のあり方を示しています。高齢者が若者に依存せずに、安心して生活できる環境作りを、まちづくりの面からもサポートしています。

現場を踏まえた制度構築のために

高齢者が安心して、いきいきと生活できる社会を作っていくために、新居浜で行われていることは参考になるモデルケースだと考えられます。そうは言っても、現状の制度の枠組みとは異なる運営方法と取っているため、新居浜医療生協でもいろいろな困難に直面することがあるようです。それは、財政的な問題であったり、制度的な問題であったりしますが、その都度現場の努力と工夫で乗り越えてきたようです。政策ビジョン研究センターでは、こういった現場の声を聞きながら、高齢者の安全・安心を担保する地域医療・介護の制度作りに向けて、また良い医療・介護サービスのサステナビリティを作り出すために研究を進めていきたいと思っています。

高松港より、瀬戸内海の朝。

在宅医療・介護の現場（愛媛県新居浜市）

ちょっと一言

政策ビジョン研究センターのホームページでは、イベント情報や研究成果、メディア情報に加え、新しいコーナーが続々と誕生しています。いずれも、「今、身の回りで起こっている変化を、できるだけリアルタイムで、みなさまにお伝えしたい。」ということで、まだはっきりとした成果の形にはなっていないものでも、ご紹介していこうという試みです。たとえば、論文コーナーに加えた、Working Paper のページや、イベントコーナーに入れた活動報告のページなどがこれに該当します。

なお、このホームページでは、現在進行形のできごとや個人的な見解などは発表しにくいので、もっと自由に書けるサイトを別途作ることも計画しています。
ご期待ください。

Pick up a word

政策関連用語集 技術ガバナンス関連用語より

ロックイン Lock-in	一定の技術を社会が選択した場合、その技術がその後の社会の選択を規定するという現象を指す。仮に、より優れた技術が登場したとしても、既存の技術が広く広まっているが故に優位を続ける。ロックインは、制度的、政治的に担保されることもある。

http://pari.u-tokyo.ac.jp/unit/words.html

このちょっと、音楽かバーカウンターを思わせるような響きを持つ用語「ロックイン」。技術ガバナンス研究ユニットより紹介された、政策関連用語です。意味を調べてみると、最初のゆるいイメージとはほとんど真逆の、固定化に関する内容でした。

ある技術が社会に受け入れられるためには、様々な条件が必要となりますが、ここでは、技術そのものの優劣よりも、どっちが先か後かという順番が重要であり、先に入った技術によって後の技術の参入が防がれる、要は早い者勝ちになる事態を指しているようです。政府がある技術を基準として採用することで、制度的にロックインを強化することもあるし、既得権益をもつ主体によって、政治的に固定化されることもあります。

使い慣れた技術を使い続けることの波及効果をあらためて、考えさせられる言葉ですね。

クリニカルデータ国際シンポジウム

3月5日（金）、鉄門記念講堂にて、「クリニカルデータ国際シンポジウム ～未来へ向けたデジタル診療情報の利活用を考える～」を開催しました。前半は日本での利活用の現状を報告するプレセッション、後半は欧米からの研究者も交えて最新の IT 研究についての報告があり、クリニカルデータの利活用について、各界の識者の方々に活発な議論が交わされました。詳細は次号にてご報告します。